

A Farewell to Arms : キャサリンの 死とヘンリーの新生

I

A Farewell to Arms 一巻を通じて、主人公ヘンリーはロマンティズム、その幻影、又抽象的な本質主義、理想主義からの離脱を成就する。彼は物語りの最後で現実即非条理の真理をキャサリンの死の立会いに於て直視する。その結果それ迄彼の内心を悩ましたペシミステイクな不安は解消し、同時に彼の青春の叙情詩も終る。この終末に到る途上彼が失うものは多いが、中でもキャサリンは彼が失う最大のものであり、それ故彼女に託した彼の幻影は何よりも大きい。“The fact that the book was a tragic one did not make me unhappy since I believed that life was a tragedy and knew it could only have one end.” (1) というヘミングウエーの言葉は *Death in the Afternoon* に語られる愛する妻に先立たれる男の不幸 “There is no lonelier man in death, except the suicide, than that man who has lived many years with a good wife and then outlived her. If two people love each other there can be no happy end to it.” (2) と照応補足するが、それはここでは大衆小説的意義しか持ち得ない。何故ならヘンリーはキャサリンの死を契機として新生するのであって、キャサリンの追憶に生きるのではなく、過去との断絶がクライマックス以後の彼の人生となるからである。

以上キャサリンの死によるヘンリーの現実転向を明らかにしようとする試みが本論文の意図する所である。

(1) Carlos Baker, *Hemingway* (New Jersey: Princeton University Press, 1963), p. 97.

(2) Ernest Hemingway, *Death in the*

Afternoon (New York : Charles Scribner's Sons, 1963), p. 122.

II

フレドリック・ヘンリーがイタリア軍と行動を共にするに到った理由は “I was in Italy... and I spoke Italian.” (1) という婦長との半ば戯れな会話のやりとり、本当の理由があるのではないとしても、それが幾分は彼の本心でもあり、彼の戦争一般に対する関心、又それ以上の生真面目な正義感、当初はジノの極端な愛国心にも近いものから、ヘミングウエー自身がキャンザス市からイタリア戦線に身を投じた大戦参加の熱望、眼疾の為アメリカ軍に入隊出来なかったが何としても必ずヨーロッパに行つて見せるという決意、これ程の show に自身参加活躍しないで見逃すことはとても出来ない “I can't let a show like this go on without getting in on it.” (2) という血気盛んな動機と同じもの、ヘミングウエーの場合は新聞記者という職業意識が世界大戦という空前の大事件に対する好奇心と自然に結びついたと考えられ、そういう青年特有の冒険を求める心理に到る迄、はつきりどれとも定め難く、ただ抑えがたい多感な大戦関与の気持が大戦参加の動機に潜んでいるとすれば、 “I was in Italy... and I spoke Italian.” という答えは彼の一語にして言いつくせない複雑な心理を探られることをかわす為の当意即妙な答えとも受取られます。大戦参加の理由は何でもあれヘンリーが実戦の苛酷な体験によって失つてゆくものは、戦争を有意義とする抽象的正義感であり、愛国心の無邪気な信奉、軍規軍律の盲目的肯定であり、美化し英雄視される様々な虚像に幻滅していく結果、彼は短期間に可速度的に現実感覚の人間に教育されていく。彼の現地教育はイタリア軍衛生部隊での生活と共に始まるのですが、イゾ

ソツオで彼が負傷した時惨死するパッシーニはその直前戦争の無意味さについて雄弁を振う。彼がいたいのは勝利によって簡単に決着するものでない無益な犠牲を強いる戦争に対する一市民としての疑問である。野戦病院にヘンリーを見舞う司祭は、パッシーニのような連中と将官、政治家、戦争屋とを対比して見せる。パッシーニのような戦争犠牲者は、戦争を止めさせる力もない。何故なら彼らはその目的の為に一度も組織化されたことがないし、万一組織化されたとしても、彼らの指導者は直ぐ様仲間を裏切ってしまうだろうから。“They are not organized to stop things and when they get organized their leaders sell them out.”

(3) ここには神に仕える身としての司祭の現実に向かい合う苛立たしい絶望感がある。従軍僧としての彼にとって宗教は逃避ではなく、彼は救いを求める者に対し等しく神の代行者でなければならない。彼が積極的に戦争に関与し得る次元は聖職者としてであり、それ以外の領域で彼は無力である。彼には司祭としての使命の自覚があり、それが熊いじめにも似た将校会食場での試練にも耐える力となる。もともとそれは初めから仲間の彼に対する善意と親しみの表現でもあるのだが、ヘンリーに作用していく戦場の実状は司祭の神経をも同様に浸透する。彼がパッシーニを持ち出したのは、もともとヘンリーに対する不満による。ヘンリーはパッシーニのように、又一般のイタリア兵のように否応なしに戦場に駆り出されたのではない。彼の志願の裏にはロマンチックな無責任な冒険心があり、だから司祭はヘンリーに向かって “You are not even an Italian. You are a foreigner. But you are nearer the officers than you are to the men.” (4) という。

ヘンリーは確かに戦争に対する局外者であり、既に七章の interior monologue で、この戦争と僕とは無関係だ——戦争なんか早く終わってしまえばいい、“Well, I knew I would not be killed. Not in this war. It did not have anything to do with me. It seemed no more dangerous to me myself than war in the movies. I wished to God it was over though.” (5) といっているのは、

勇み込んで参加した戦争に対する幻滅感の来たる意外な早さを証明する。司祭はヘンリーとパッシーニの差を指摘する。あなたには戦争はどうでもいいので、あなたは負傷はなされたが、戦争はおわりになっていない。“Still even wounded you do not see it. I can tell. I do not see it myself but I feel a little.” (6) しかしこの司祭の考えとは別に、ヘンリーの気持は実はパッシーニに近く位置し、厭戦に於て彼に共感し戦争の実体を彼と同じに或程度見極めているといえる。志願して参加した以上彼は公言を憚り、パッシーニの雄弁に一応の反論は試みるが内心の共感隠すべくもない。自分らはこの辺で口をとぎすべきだ、調子に乗ってしゃべりすぎる、ヘンリー中尉殿であるからといつても、マナーがいう。テネンテ殿は嫌な気持ちで聞かれているのではない、自分らはテネンテ殿の思想を転向出来る。“We will convert him.” (7) とパッシーニが答える。それはパッシーニがヘンリーの内心の共感に気付いている証左であろう。司祭と前後してヘンリーを訪れるリナルディは、病室にぎごちない当惑感をもたらした司祭とは一見正反対の性格であり、元気よく早足でヘンリーのベッドに到るや否や彼に接吻する。それから立続けにしゃべりまくる。看護兵に命令する、コルク抜をもってこいと。酒をつぐ、すばらしいニュースを知らせてやるという。それはヘンリーに与えられるはずの勲章メダリヤ、ダルジエントである。更に彼はイギリスの勲章も手に入れてやろうという。ゴリツィアの娼婦については彼女らは最早女ではないという。余り顔なじみになってしまったので、いわば戦友とでもいふべきものになってしまった。司令部の行政不手際こそ責めらるべきである。彼らは彼女達を後方の塹壕にもぐりこんでいる卑劣な連中の為に保存しているのだ。彼はヘンリーと司祭の親しい関係を少し同性愛的とからかい、キャサリンをイギリス製の冷たい女神と呼び、更に君は全身火と煙で中身は空っぽ、僕らは兄弟でお互い馬が合う、君はアメリカ人のふりをしているだけだ、“You are really an Italian.” (8) という。司祭は苛酷な戦場と戦争の無意味さに心疲れて、“You are not even an Italian. You

are a foreigner.” 又 “You are a foreigner. You are a patriot.” (8) というが、リナルディの感受性が戦争に免疫なのではない。彼の陽気な言動は見せかけであり、日に外科手術の腕前は上がる一方だ、ランセットにも君が翻訳してくれば論文を送ろうという彼の自慢話も、表現派であるのはイタリア人の特性であるとはいえ、何か常態ならざる過剰演技を感じさせる。司祭は、あなたは負傷はされたが戦争そのものは、おわかりにならないという。しかし参加の立場は局外者であっても、ヘンリーは既に戦火の洗礼を受け否応なしに戦争を理解しつつあるのだし、又一方戦傷者の手当てに明け暮れるリナルディは司祭同様戦争の無意味さに疲れ、それ故一層軽佻多弁である。それは現実の重圧感からの逃避であり、司祭のアブルツィに相当する。

ヘンリーがミラノの病院からゴリツィアに帰って来た時、彼が見出すのは不安定な戦況の下に疲れ果てたイタリア軍である。前戦の上官殿のもとに帰れて嬉しいですよというヘンリーに、大佐は “You are very good to say so. I am very tired of this war. If I was away I do not believe I would come back.”

(9) と答える。リナルディはヘンリーに再会し口を開くや否や、戦争呪詛の言葉を吐く。この戦争はおれを殺してしまう、この戦争にかかっては気がめいるばかりだ。これはひどい戦争だ、坊や、おれのいうことを信じるかね、この戦争はひどい、 “I tell you this war is a bad thing. Why did we make it anyway?” (10) 彼は真偽は別として梅毒にかかっていると思い水銀剤を常用している。軍務の過労の後にきた虚脱感、不断の多飲、根底にある厭戦思想は、ヘンリーが将校食堂にもどった日の夕食の席上、彼を一種廃人のように見せる。医療に打込む時のみ彼は幸福である。それは彼が日一日と自滅する “Self-destruction day by day.” (11) なる現実逃避の限界に辿りつき、そのままでは自滅は早晚免れないことを示している一方司祭はヘンリーがミラノに立った当時よりも自信に満ちている。それは一つは彼が死に直面する人間に対する神の代行者であるという戦権による。多数の戦死者が出たその夏の戦闘は

彼にとって試練ではあったが同時に彼に彼の戦権を認識させることになった。又夏の敗戦が結果として、彼の戦争観を彼だけのものではなく、以前は可能性がないと思われた将校の間に迄拡がり一般化したからである。 “You know how your major is? Gentle? Many people are like that now.” (12) という司祭の言葉は、彼らが戦争の実体を認識し心に変化が起ったことに言及する。しかしそこから司祭は論理的に飛躍して、戦争は終わるでしょう、味方も敵も同時にですという。ヘンリーは夏の戦闘の勝利者はオーストリア軍だから、彼らは戦争を止めるつもりはないはずだと反論する。司祭は “I believe and I pray that something will happen. I have felt it very close.” (13) と戦争終末の差迫った見通しをヘンリーに披瀝する。当然彼の精神の強さもそこに由来し、それはアブルツィの思慕に通じる。夏の戦争体験を通じて、司祭は宗教的に一層の自信を得、リナルディは自滅感から逃れることが出来なくなったとしても、この二人はいずれも一度は現実を直視した。ただしそれから後の現実分析現実対処の過程に進む上で共に挫折した。司祭は信仰と同意義である非合理に逃げ、彼の戦争終結の希望は現実遊離の祈り、見ずして信じる祈りの原理に基づく希望である。リナルディは司祭と反対な現世感覚の所有者であるが、ビラ・ロッサが慰めのすべてとなるタイプではない。彼が大いにビラ・ロッサの効用をイギリスの女神と対比して説くのは、その言葉通りに受取る以外、彼の持って行き場のない繊細な神経の仮面、自虐的誇張と考えられる。 “I am pure, . . . I am like you, baby. I will get an English girl too. As a matter of fact I knew your girl first but she was a little tall for me. A tall girl for a sister.” (14) という冗談口にも、知らず或程度彼の本心は露呈されている。

ヘンリー、司祭、リナルディは、信念に於て思想に於てデリケートな落差はあるが、彼らは性格的に同一人物の三様変態と考えられる。ただしヘンリーは司祭に比べては信仰に無縁であり、リナルディに比べては無経験でナイーブである。彼がリナルディに “You are igno-

rant. Stupid...Uninformed. Inexperienced, stupid from inexperience.”(15) というのは、これとは別の意味に於てであり、リナルディの真実の恋愛体験の欠如を指しているのである。といっても、彼自身 Book One の段階では、キャサリンとの関係はお互いに真摯なものではない。キャサリンとの2回目のデートでは、ヘンリーは盛りのついた犬のようで、その結果は目から火花が散ることになるが、キャサリンも純情とはいえない。適当にヘンリーをあしらった後では却って彼女自身が興奮して唇を開き、ヘンリーの肩にもたれて泣く。

“Oh, darling,” she said. “You will be good to me, won't you?”

What the hell, I thought. I stroked her hair and patted her shoulder. She was crying.

“You will, won't you?” She looked up at me. “Because we're going to have a strange life.” (16)

ヘンリーは、ここで彼女の愛に応じながら、畜生何としたことだと独白する。3回目の訪問では、キャサリンは2回目に別れた時の雰囲気ですでにヘンリーに近づく。

“You did say you loved me, didn't you?”

“Yes,” I lied. “I love you.” I had not said it before.

“And you call me Catherine?”

“Catherine.” We walked on a way and were stopped under a tree.

“Say, ‘I've come back to Catherine in the night.’”

“I've come back to Catherine in the night.” (17)

ヘンリーには、キャサリンの真向きの愛情は、重荷であり滑稽である。しかしここ迄漕ぎ着けた以上は成可く上手に恋人の役を演技するだけで、その代償としてこれから先どんな厄介なことになろうとも仕方がない、行く所迄行く迄だと

考える。しかしキャサリンとても芝居を打っていたのである。

She looked down at the grass.

“This is a rotten game we play, isn't it?”

“What game?”

“Don't be dull.”

“I'm not, on purpose.”

“You're a nice boy,” she said. “And you play it as well as you know how. But it's a rotten game.” (18)

彼女は、私を愛しているふりなんかなさる必要はありません、それは今晚はおしまいという。しかし結局別れる時には接吻する。ヘンリーは彼女が廊下を奥に消えて行くのを見守ってから宿舎に帰る。4回目にヘンリーが酒を飲んでキャサリンを訪ねた時は、前線に行き負傷する前に当たるが、キャサリンは病気で会うことができない。その時になってはじめてヘンリーはキャサリンに会うことを遊び半分と考えていたことに気が付き、不意に空虚な寂しさを感じる。

Book One に於ては、ヘンリーがキャサリンを本当に愛したという証左はない。しかし Book Two になって舞台がミラノに移ると、ヘンリーとキャサリンとの仲は急速に進展する。ヘンリーはアメリカ病院で彼女と出会った時、何もかも今迄の気持がひっくり返ったようで、彼女を一目見るや彼女を愛してしまう。

“When I saw her I was in love with her. Every thing turned over inside of me.” (19) そして彼女が病室から出た後、ヘンリーの独白がある。神様だって知っていたはずだ、僕が彼女と愛し合うことを願ってなんかいなかったことを、僕はどんな女の子とも愛におちいるなんて願っていなかったのだが、今では神様だって御存知だ。僕が彼女を愛してしまったことを……

God knows I had not wanted to fall in love with her. I had not wanted to fall in love with any one. But God knows I had and I lay on the bed in

the room of the hospital in Milan and
all sorts of things went through my
head but I felt wonderful (20)

これはヘンリーが認めたキャサリンとの新しい
関係であり、以前の戯れ事から異質な愛の領域
に入ったことの告白である。

(1) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964), p. 22.

(2) Marcelline Hemingway Sanford, *At the Hemingways* (Boston: Little, Brown and Company, 1962), pp. 156-57.

(3) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964), p. 74.

(4) *Ibid.*, p. 73.

(5) *Ibid.*, p. 38.

(6) *Ibid.*, p. 73.

(7) *Ibid.*, p. 53.

(8) *Ibid.*, p. 69.

(9) *Ibid.*, p. 171.

(10) *Ibid.*, p. 174.

(11) *Ibid.*, p. 178.

(12) *Ibid.*, p. 183.

(13) *Ibid.*, pp. 184-85.

(14) *Ibid.*, pp. 177-78.

(15) *Ibid.*, p. 69.

(16) *Ibid.*, p. 27.

(17) *Ibid.*, p. 31.

(18) *Ibid.*, p. 32.

(19) *Ibid.*, p. 95.

(20) *Ibid.*, p. 97.

III

ヘンリーは彼同様デリケートな神経の司祭及びリナルディと共に、現実には否応なしに直面してゆくことから、理想主義、ロマンチズムを失うので、彼が忌み嫌うものの一つは Book Three で明らかになる愛国者ジーノの愛国心であり、ジーノはいい奴だと思っても彼の愛国心には共鳴出来ない。神聖、栄光、犠牲、何事

も無駄ではなかったとかいう表現には、彼は何時も当惑することになり、それらは村落の名称、道路番号、河川の呼名、連隊の番号、何月何日の日付といった具象的な名詞に比べれば猥褻でしかない。彼が身につけたものは自然な実存感覚であり、それはリナルディのニヒリズムにも、司祭のアブルッツィを象徴とする信仰逃避にも通じる可能性があった。しかしヘンリーは、Book Two で、キャサリンとのロマンチックな恋愛関係を突然変異的に発展させる。それは戦火による洗礼とは又別な、もう一つの洗礼であり、一種宗教の心情の次元に踏込んだのである。勿論ヘンリーもキャサリンも伝統的キリスト教を信じていない。強いていえば彼らの宗教心は現世的敬虔 *Weltfrömmigkeit*、情緒的宗教 *Stimmungsreligion* (1) のものであり、現世の人間関係に予想される愛に対する敬虔なる心情、絶対支配者なる神、天地創造者としての神を必要とする中世的世界観を無効としてしまった後の現代人の宗教心である。彼らは町に出る時、馬車の中で、手に触れ合うだけでも幸福である。彼らはキャサリンの夜勤を利用してヘンリーの病室で愛の営みに耽り、堰を切ったように愛情生活に没頭し、それが療養以外の唯一の生活となる。

“Oh, darling, darling, darling,” I said.

“You see,” she said. “I do anything you want.”

“You're so lovely.”

“I'm afraid I'm not very good at it yet.”

“You're lovely.”

“I want what you want. There isn't any me any more. Just what you want.”

(2)

あのことはまだ余り上手くないのじゃないかしらという性的言及も、Book Oneの愛の駆け引きでヘンリーを手玉にとったキャサリンと違って今ではナイーブな響きがあり、今では私は存在しないも同様というキャサリンの言葉は情緒的宗教に向う第一の発端として認められる。そ

れは後程、年をとりすぎて宗教心をなくしてしまったというグレフィ伯が、君の宗教心は夜にだけくるといわれるとすれば、君は愛しているので、それが宗教心というものだということをお忘れなさらんようにと “Then too you are in love. Do not forget that is a religious feeling.” (3)、ヘンリーに指摘する宗教心である。十八章で、彼らはキャサリンがアメリカ病院に現われた日をもって結婚記念日とすることに合意するが、子供が出来た場合を予想すると、ヘンリーは正式に法律上の結婚手続きをとりたいと思う。それに対しキャサリンは、私達は真実結ばれているので、これ以上結婚だなんて考えられない “There isn't any me. I'm you. Don't make up a separate me.” (4) といい、又前線に立つヘンリーに与えたアンソニー聖人のペンダントについて、あれは誰かにもらったお守りで別にカトリックではないし信仰心はない。ただあなたと別れるようになることだけが心配で、あなたは私の宗教で、あなたは私の所有するすべて “You're my religion. You're all I've got.” (5) という。

ヘンリーとキャサリンのこの愛の関係が、純粋な形で凝結するのを見るのは Book Five でモントルーから上った山腹の田舎屋で部屋住いの暮らしが始まってからである。ヘンリーは、Book Five の終りに近く、危ふく銃殺を逃れメストレに向かう軍用列車の中で、イタリア軍とは縁が切れたし、この戦争にはもう彼の出る幕はないと考える。司祭とリナルディのことも考えるが、最早彼らに会うこともあり得ないし、過去の彼らと起居を共にした生活は終ってしまったのだということがわかる。Book Threeでは、戦地や、そこで知り合った連中のことを時には思い出すが、司祭とリナルディにしても、彼の意識の中で、無縁な遙かな過去の世界に消えてしまい、彼らのことは余り気にかからないし、戦争のことは考えたくもない。 “I don't want to think about the war. I'm through with it.” (6) と、ヘンリーはキャサリンにいう。彼は戦争とそれに関係する一切を後に振捨てて、Book Two でのキャサリンとの愛を完成する為、牧歌的なスイス山上に逃れたことになる。山腹の松林の中の褐色の木造家屋、

晴れた日にその窓から見える葡萄畑、石垣、平野、遠景の町の家並、湖畔、2本の木のある孤独な島、白鳥、泳ぐと水あとを残すカイツブリの群れ、そして対岸のフランス側の山々、あまりにも遠く、影も投げかけないドン・デュ・ミイディの雪をいただいた高山。大概是本や雑誌を読んで日を過し、トランプ遊びもする。夜になれば早目にベッドにつく。開かれた窓から見える冷たい星、窓下の松の木、彼はキャサリンと気持ちよくベッドに眠る。夜半目をさましても戦争は遙かに遠いことに思われる。彼らが今だに山岳地帯で戦っていることは、新聞で読んで知っているのだが、戦争はどこかよその大学のフットボールの試合のようにしか思えない。こうした抒情詩的環境で孵化されるヘンリーとキャサリンのロマンチックな孤立した愛情生活は、同時に肉体的希求を伴う現世的敬虔ともいふべきヘミングウェイ式愛の昇華に、無際限に近づく可能性がある。

もっとも何気なくキャサリンがいう、 “Do you think I ought to drink another beer? The doctor said I was rather narrow in the hips and it's all for the best if we keep young Catherine small.” (7) なる医者注意、ヘンリーは当然心配になって何と外にいわれたかという。これは Book Two で、キャサリンの “...I'm afraid of the rain.” ...“I've always been afraid of the rain.” (8) に対してヘンリーがその理由を問い質すと “I'm afraid of the rain because sometimes I see me dead in it.” (9) という不吉な運命に対する識閥下の不安に連なっているものであり、

When there was a good day we had a splendid time and we never had a bad time. We knew the baby was very close now and it gave us both a feeling as though something were hurrying us and we could not lose any time together. (10)

何かに急ぎ立てられ共に過ごす時間の一刻も失うことは出来ないといった感じを二人に与えた

という40章の最後は、彼らが共に過ごす時間が永遠に遮断され不可知の出来事により取上げられてしまう危険の予知でもあり、又この小説の行きつく先の破局、キャサリンの死、それは無規範で説明のつかない、無意義な代償なき性質であるからこそ、余計に悲劇的である死を暗示している。しかしスイス山上の生活は、彼らが過去との因縁を断ち切って、彼らなりの性愛の天上至福世界に入ってしまったことであり、不安の影は迫りつつあるが、それは彼らの周辺に結晶した自己抹消的愛の具象生活により、当座対比的に無力化され、殆んどその暗い影が、彼らの意識に投影されることはない。自己抹消的愛とは司祭が野戦病院でヘンリーに語ったものである。“What you tell me about in the nights. That is not love. That is only passion and lust. When you love you wish to do things for. You wish to sacrifice for. You wish to serve.”(11)今やヘンリーとキャサリンは司祭の説いた真実の愛を実践しているのである。ただし彼らの愛は熱情、性欲の要素と不可分であり、純粹に天上的ではないとしても、司祭の愛の理念を地上に於てエロチックな姿に成就したのである。38章でキャサリンが髪を短くしたいということから、

“It might be nice short. Then we'd both be alike. Oh, darling, I want you so much I want to be you too.”

“You are. We're the same one.”

“I know it. At night we are.”

“The nights are grand.”

“I want us to be all mixed up. I don't want you to go away. I just said that. You go if you want to. But hurry right back. Why, darling, I don't live at all when I'm not with you.”

“I won't ever go away.” I said. “I'm no good when you're not there. I haven't any life at all any more.” (12)

そして39章の最後、

“Oh, you're so sweet. And maybe

I'd look lovely, darling, and be so thin and exciting to you and you'll fall in love with me all over again.”

“Hell,” I said, “I love you enough now. What do you want to do? Ruin me?”

“Yes. I want to ruin you.”

“Good,” I said, “that's what I want too.” (13)

これら愛の睦言は、愛情に酔った男女の在り来りな表現ではなく、真剣な愛の全体的、包括的な高揚成就の体験である。それは Book One 以来何時の間にかロマンチックな方向を辿り、遂には愛のアイディアリズムの極点に到達した姿である。

41章に入ってキャサリンは出産の為に入院する。妊娠を最初にアメリカ病院でヘンリーに告げた時、キャサリンはヘンリーに、あなたは畏にかかったというような感じがしないかと聞く。ヘンリーは、それは少しはね、だが君にかけられたのではない、人間は生物学的にいつ何時でも畏にかけられているという感じがするものだ と答える。“You always feel trapped biologically.” 畏にかかったという感じはキャサリンの雨を恐れる識閥下の不安に通い、41章では、その危惧が現実 に形をとることになる。この最終章にはヘンリーの比較的長い、interior monologue が2つと、短いもの1つが見出される。最初の interior monologue は、“Poor, poor dear Cat. And this was the price you paid for sleeping together. This was the end of the trap.” に始まり “But what if she should die? Hey, what about that? What if she should die?” に終わる。(14) 次の interior monologue は “So that was it. The baby was dead.” に始まり “I think the cup of water on the burning log only steamed the ants.” に終わる。(15) 最後の interior monologue は “Everything was gone inside of me. I did not think. I could not think.” に始まり “Please, please, dear God, don't let her die.” に終わる。(16)

“So now they got her in the end. You never got away with anything. Get away hell.” (17)

Now Catherine would die. That was what you did. You died. You did not know what it was about. You never had time to learn. They threw you in and told you the rules and the first time they caught you off base they killed you. Or they killed you gratuitously like Aymo. Or gave you the syphilis like Rinaldi. But they killed you in the end. You could count on that. Stay round and they would kill you. (18)

これら interior monologue の断片は、過去の諸々の苦い人生体験がヘンリーに教え込み、何時の間にか潜在意識の暗い領域に巣くっていたもので、キャサリンの原初的不安に通じ、その中心問題は人生に当初より仕掛けられた無差別な罠であり、人間は誰でも終いにはその罠に捕えられる運命にあるという彼の潜在意識に宿るペシミスティックな世界観である。この世界観は彼の人生の初期の経験が生み出したものであるかも知れないし、或いは彼生得の感性が多分経験とは無関係に先験的に与えたものであるかも知れない。彼が事実体験したことの回想形式で、しかも彼のペシミスティックな世界観を、はっきり掘り出して見せてくれるのは、2番目の interior monologue の後半、燃える蟻の部分である。焚火の丸太の上の燃える蟻の大群はどう逃げても結局は逃げ切れずに死ぬのは明白である。ヘンリーはその小宇宙の救世主になって丸太を遠くに投げ、世界の終末から蟻を救おうかとも考えるが結局何もしない。ただコップの水を燃える丸太に投げるだけで、それもコップを空にしてから水わりのウイスキーを飲む為だった。人間も蟻同様逃れ得ない罠にかかる。神は多分不在であり、いたとしても世界の終末の苦しみから人間を救うことには無関心なのである。神のなす業も、人間とは無関係な測り知れない遊びであり衝動であり、無差別な偶然である。デリケートな心情の所有者であるヘンリーは、最終章の interior monologue で彼の

密教ともいふべき本心を吐露したのである。その本質は nada であり world pessimism であると同時に、現実的なものは不条理、非理性的であり、最大の悲劇とは規範の欠如である無神論的実存主義にも或る意味に於て一致する。最後の interior monologue はキャサリンの難産で徹底的に追いつめられたヘンリーが、帝王切開で取り出された赤子は死子であり、手術後のキャサリンは間もなく内出血で重態におちいるという内心最も恐れていたことの現実化した現実に、今となつては夢の如き一縷の希望から醒めて事態進展に直面してゆく上の最後のあがきである。無宗教の彼が、ここでは遂に、神よ彼女を助け給えと精神錯乱状態で謔言のように祈る。Don't let her die. という呪文ともいふべき祈りは或程度の variation をもって115語の monologue に9回繰返される。

...Don't let her die. Oh, God, please don't let her die... Please, please, please, dear God, don't let her die. Dear God, don't let her die. Please, please, please don't let her die. God please make her not die. I'll do anything you say if you don't let her die. You took the baby but don't let her die. That was all right but don't let her die. Please, please, dear God, don't let her die. (19)

この呪文は、キャサリンが死に、ヘンリーが看護婦を追出して死骸となったキャサリンと独り最後の別れをする場面に接続する。即ちヘンリーは、ここで彼のロマンティックな幻影のすべてを清算せざるを得ない。“But after I had got them out and shut the door and turned off the light it wasn't any good. It was like saying good-by to a statue. After a while I went out and left the hospital and walked back to the hotel in the rain.” (20)

(1) Eduard Spranger, *Die Magie der Seele* (Tübingen: Verlag Leopold Klotz

Gotha, 1949) .

(2) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964) , p.110.

(3) *Ibid.* , p.272.

(4) *Ibid.* , p.119.

(5) *Ibid.* , p.120.

(6) *Ibid.* , p.309.

(7) *Ibid.* , p.304.

(8) *Ibid.* , p.131.

(9) *Ibid.* , p.131.

(10) *Ibid.* , p.321.

(11) *Ibid.* , p.75.

(12) *Ibid.* , p.310.

(13) *Ibid.* , p.315.

(14) *Ibid.* , pp.330—31.

(15) *Ibid.* , pp.338—39.

(16) *Ibid.* , p.341.

(17) *Ibid.* , pp.330—31.

(18) *Ibid.* , p.338.

(19) *Ibid.* , p.341.

(20) *Ibid.* , p.343.

Ⅳ

彼らの愛の関係は、最初戯れ心から出発し、Book Two からは肉体関係の直中でもロマンティックな青春謳歌となり、それは又次第に恋愛感情の純化と共に形而上学的様相を帯びるに到り、スイス山上で始んど完全な至福の愛情生活を体験するが、一転して出産の為モントルーの町に下ってから、絶頂に到り持続しようと努力したすべてのロマンティックな影象は消えてゆき、その過程に於ては、ヘンリーの心に深く潜んでいた暗い世界観も interior monologue に語られるし、又ヒステリックな呪文も聞かれるのである。ヘンリーはキャサリンとの肉体関係に常にそれ以上の神秘的価値を見ていたのに彼女が死んだ時単に彫像としか見えなかったということ、これがこの小説のクライマックスである。死せるキャサリンは肉体即物質に還元される。生命なき肉体は非物象ではなく正に物質と等価であり、神秘的価値の入り込む余地がなくなったということに、又そこから必然的に溯

る瞬間的な真理認識、現実直視に到る道が示唆されるのである。この地点からは彼には本来自己欺瞞自己陶醉である interior monologue は存続しない。無潤色の固い現実認識に到った彼は、その落下しつくしたレベルから出発することになる。それは “The Original Conclusion to *A Farewell to Arms*” に画かれる彼の姿にも合一する。

I could tell you what I have done since March, nineteen hundred and eighteen, when I walked that night in the rain back to the hotel where Catherine and I had lived and went upstairs to our room and undressed and slept finally, because I was so tired—to wake in the morning with the sun shining in the window; then suddenly to realize what had happened. I could tell what has happened since then, but that is the end of the story. (1)

雨に濡れて独り病院に帰るヘンリーの描出にはセンチメンタルな雰囲気はない。ただ現実直視の衝激と肉体的疲労があるのみである。司祭とリナルディの道が現実逃避の袋小路である時、彼のみが現実を透過し得たのである。幻影を離脱し自己瞞着の昏睡から目覚め、美化もなく根柢づけも許されず、無償に死も来り得る現実世界に新生したのである。「日は又昇る」の登場人物は悲劇的だが、しかし本当の主人公は大地であり、その恒常性に勝利感を味わうことができるというヘミングウェイの言葉が伝えられているが、“The characters in *Sun Also Rises* were tragic, but the real hero was the earth and you get the sense of its triumph in abiding forever.” (2) *The Sun Also Rises* の大地の恒常性は、*A Farewell to Arms* に於て主人公ヘンリーが移り変る人間世界から離れて最後に立つ大地である。

Many things have happened. Everything blunts and the world keeps on. It never stops. It only stops for you. Some of it stops while you are still

alive. The rest goes on and you go on with it.(3)

叙情詩は終わり、キャサリンの記憶も自然に脱落する。叙情詩の死と共に、彼に付きまとった暗い世界観も姿を消す。彼の独白に現われたペシミズムは、人生の視点を青春期に持つ甘さであり、純情だからこそ、それだけ他に期する所の多い自己満足欲望追求の原理に支配されていたのである。

(1) Ernest Hemingway, "The Original Conclusion to *A Farewell to Arms*," *Ernest Hemingway : Critiques of Four Major Novels*, ed. by Martin Steinmann, Jr. (New York : Charles Scribner's Sons, 1963) p.75.

(2) A. E. Hotchner, *Papa Hemingway* (London : Weidenfeld and Nicolson, 1966) , p.48.

(3) Ernest Hemingway, "The Original Conclusion to *A Farewell to Arms*," *Ernest Hemingway : Critiques of Four Major Novels*, ed. by Martin Steinmann, Jr. (New York : Charles Scribner's Sons, 1963) , p.75.

Bibliography

Hemingway, Ernest. *A Farewell to Arms*. New York : Charles Scribner's Sons.

Hemingway, Ernest. *Death in the Afternoon*. New York : Charles Scribner's Sons.

Baker, Carlos. *Hemingway : The Writer As Artist*. New Jersey : Princeton University Press, 1963.

Rovit, Earl. *Ernest Hemingway*. New York : Twayne Publishers, Inc., 1963.

Killinger, John. *Hemingway and the Dead Gods*. University of Kentucky Press, 1960

Brooks, Cleanth. *The Hidden God*. Yale University Press, 1963.

Young, Philip. *Ernest Hemingway : A Reconsideration*. The Pennsylvania State University Press, 1966.

Atkins, John. *The Art of Ernest Hemingway*. London : Spring Books, 1964.

Fenton, Charles A. *The Apprenticeship of Ernest Hemingway*. New York : The Viking Press, 1958.

Sanford, Marcelline Hemingway. *At the Hemingways*. Boston : Little Brown and Company, 1962.

Hotchner, A.E. *Papa Hemingway*. London : Weidenfeld and Nicolson, 1966.

Baker, Carlos (Editor). *Hemingway and His Critics*. New York : Hill and Wang, 1961.

Steinman, Martin, Jr. (Editor). *Ernest Hemingway*. New York : Charles Scribner's Sons, 1963.

Light, James F. "The Religion of Death in *A Farewell to Arms*." *Modern Fiction Studies*. Vol. VII (Summer, 1961).

Hale, Nancy. "Hemingway and the Courage to Be." *The Virginia Quarterly Review*. Vol. XXXVIII (Autumn, 1962).

Gelfant, Blanche. "Language as a Moral Code in *A Farewell to Arms*." *Modern Fiction Studies*. Vol. IX (Summer, 1963).

Holder, Alan. "The Other Hemingway." *Twentieth Century Literature*. Vol. IX (October, 1963).

Young, Philip. "Our Hemingway Man." *The Kenyon Review*. Vol. XXVI (Autumn, 1964).

Motola, Gabriel. "Hemingway's Code : Literature and Life." *Modern Fiction Studies*. Vol. X (Winter, 1964—1965).

Wegelin, Christof. "Hemingway and the Decline of International Fiction." *The Sewanee Review*. Vol. LXIII (April—June, 1965).

Fuchs, Daniel. "Ernest Hemingway's Literary Critic." *American Literature*. Vol. XXXVI (January, 1965).

Glasser, William A. "A Farewell to Arms." *The Sewanee Review*. Vol. LXIV (Spring, 1966).